



～自分で考え 友達と一緒に活動し 振り返りのできる子～

学校だより 7月

令和4年7月1日

荒川区立

峡田小学校

校長 津田 利枝

日本式教育その1 ～水泳～

校長 津田 利枝

7月の声を聞く前に、真夏を思わせる連日の猛暑、梅雨明けもいち早く発表されました。例年、プール開きをしても6月は、気温も水温も低く入れないことが多いのですが、今年は、毎日、「絶好のプール日和」。今年度も、新型コロナウイルス対策として、単学年ごとにプールに入ります。声を発するのはできるだけ控えながらの水泳学習です。

学校にプールがあり、水泳の授業があるというのは、私たちにとっては、当たり前のことのように思いますが、日本のように、学校教育で水泳学習を行うのは、世界的にはとても珍しいことだそうです。

日本で、本格的に水泳の授業が始まったのは、1955年以降です。水難事故をきっかけに、当時の文部省が「泳ぎの習得は命を守ることにつながる」として、全国の小中学校に対してプールの設

置と水泳授業の取組を学習指導要領に明示しました。かれこれ、70年近く行われてきた水泳学習ですが、時代の流れや気象状況に応じて、様々な変化も生まれています。

蛇口が上向きで二股に分かれた独特な形状の洗眼器（目洗い器）は現在は使用しません。蛇口を加減せずにひねって噴水のように水柱があがって大騒ぎ（大喜び？）の光景は、「今は昔・・・」です。ほとんどの子がゴーグルを着けて水に入ります。近年は、あまりの暑さのために、日焼けを通り越して肌が火傷状態になってしまうこともあり、ラッシュガードを身に付ける子も増えています。「暑いからプールに入る」が「暑すぎてプールは中止」という判断をせざるを得ないこともあります。また、学校プールから民間プールを利用しての水泳授業に方向転換する自治体も出てきています。

本校は、可動床（水深が調整できる）で、プールサイドもゆとりのある恵まれた施設設備のプールです。泳法指導に加えて、着衣泳も指導することで、プールのみならず海や川でも楽しく水に親しみ、いざという時、自分の命を守ることが出来る力を身に付けるようにしていきます。

夏休み初日からは4年生が下田の海に行きます。また、前年度に続き、水泳コーチが夏季水泳指導に加わります。